中原　泉
一枚の写真②

3校合同姉妹校調印式の夕宴

私どもは，1986年（昭和61年）3月13日，IADRがワシントンD.C.で開催中，在米スイス大使館において，スイス大使の立ち会いのもとに，日本歯科大学，ミシガン大学，ベルン大学の3校合同の姉妹校の調印式を挙行した。本学とベルン，ミシガンとベルンが，おのおの姉妹校提携の署名をした。

その夜，市内のレストラン。スイス大使夫妻を招いて，3校関係者の夕食会を催した。和気あいあいとした夕宴であったが，一刻，険しいムードが漂った。

私の右にベルンのハンス・グラフ教授，左に同じくニコラス・P・ラング教授が座った。そのとき私はまだ，補綴学教授のラングが，歯周病学のハンスのポストを切望しており，二人は犬猿の仲であることを知らなかった。本学とベルンの姉妹校提携を進めたのはハンスであり，IADRの折に在米スイス大使館で調印するという，奇抜なアイデアを実現させたのも彼であった。

席上，ハンスが私の専攻を尋ねたので，少々ためらいながら，「歯科医学史です」と答えた。すると横からラングが，「信じられない！」と奇声をあげた。思わずハンスが，スイス・ジャーマンで彼をたしなめた。私の専攻が歯科医学史と聞くと，不審がる人は少なくない。のちに，タイのチェンマイ大学歯学部長と昼食の時，同じ返事をすると彼は絶句したあと，「貴方は歯科医師ですか!?」と真顔で問い返された。彼らは，歯科医師なのに臨床をやらず，愚らぬ歴史などやっていて勿体ない，というのだ。

その通りなのだろうが，私は，臨床をやらない歯科医師がいても良いと思っている。それでも，新潟の「医の博物館」を見学した幾人かは，「貴方の専攻が，歯科医学史という意味が分かりました」と共感の握手を求めてきた。博物館の陳列ケースを見て，「まあ！　なんでフォシャールの原本が，ここにあるの!?」と，パリ第7大学の女性教授は金切声

をあげた。近代歯科医学の父と謳われるフランスのP.フォシャールだが，パリでも，こんなに初版等の原本が揃っている所はないという。

斯く，温故知新の大切さを理解する人は少ない。近年，私の研究は歯科人類学にシフトしているので，「歯科人類学です」というと皆さん一様に興味を示す。アンソロポロジィのほうが納得していただけるので，最近は歯科医学史は封印している。

夕宴にもどるが，私は，本学の『歯学』についてタドタドしく説明した。わが国ではすべての歯学部が学術誌を刊行しているが，欧米では歯学部だけの紀要を持っている所は稀である。むろんベルンにはないから，ラングはイラッときたのだろう。「日本語でしょ？」と冷やかなので，論文のアブストラクトをまとめた英文誌『The Journal of the N.D.U』があると話す。すると彼は，「メッドラインに載った雑誌しか読まない」と豪語し，「インパクト・ファクターのない雑誌は認めない」と言い捨てた。私は憮然となったが，メッドラインとインパクト・ファクターという言葉が，針刺すように耳に残った。

写真は，険悪になる前の一カットである。左から３人目がミシガン大学のR.L.クリスチャンセン歯学部長（Dick），その手前がラング，その向いがハンス，彼の右は古屋英毅教授，スイス大使，小林義典教授である。ラングは，大柄で髭（口ひげ）鬚（あごひげ）面で声が大きい。後ろを向いている私は45歳，まだメタボではない。まあ，ハンスと親しい私への八ツ当たりなのだが，四半世紀におよぶ国際活動のなかで，こんなに露骨に反感を持たれたことはない。

のちに，ハンスは病いに倒れ，彼のあとラングは待望の歯周病学の教授になった。馬力のある研究者であったから，歯周病学の先生方であれば彼の名前は知っているだろう。

ラングの暴言から10年ほど経って，わが国にも国際化の波が押し寄せてきた。学術の世界では，IFという十字架が高々と揚げられ，IFに非ざれば研究に非ずという勢いで学界を席巻した。私は，あのときラングが誇示した言葉だ，と合点がいった。

このIF至上主義の奔流に焦り，私は，３ヶ月間悩みに悩んだ末，2000年に本学の「研究改革2000」を提唱した。その要訣は邦文誌『歯学』を廃し，英文誌『*Odontology*』を刊行することであった。歯学会は翌2001年に『*Odontology*』を発刊し，日本を発信基地とする最初の国際歯科医学雑誌が生まれた。

早くも2003年にはMedlineに収録され，2006年Science Citation Index Expandedに収録，2009年に1.8という予期した以上のIFが付いた。これにより翌年には，それまで30編ほどであった投稿論文が，一挙に150編の５倍に急増し，私たちはIFの偉力を思い知らされた。大学研究者からは〝快挙〟と称賛されたが，結局，IFを獲得するのに10年かかった。

数年前，『*Odontology*』の初代編集長であった筒井健機教授が，「あのとき決断していなかったらと思うと，ゾッとします」と述懐し，私も心底から同感した。今でも邦文誌を廃止した歯学部はなく，自画自賛になるが，本学の『*Odontology*』がトップランナーとして独走している。

実は，ベルンとの調印の９ヶ月前の６月，私と小倉英夫助教授（当時）は，姉妹校行脚に欧州を巡った。ミシガン大学のDickの勧めで，私どもはハンス・グラフ教授を訪れた。ベルンはスイスの首都，中世を想わせる美しい街である。彼は待ち兼ねていたように，にこやかに力強く握手を求めてきた。一見して，東洋ジャポネ好きの優れた国際人であった。私たちは，１時間ほど親しく話し合った。実は，次に訪問するチューリッヒ大学歯学部が，私たちの姉妹校提携の本命であった。Dickから聞いてハンスは，そのことを知っていた。

別れ際，ドアを出たところで，ハンスの一言が飛んできた。「Hey！ チューリッヒとやるなよ」彼のイントネーションは，親しみをこめた，しかし真剣な声音であった。私たちは，たった１時間で旧知の仲になっていたのだ。その時，ベルン大学との提携が決まったと言ってよい。

（写真撮影：小倉英夫〈当時〉助教授）